

茶の湯文化学会会報 No.66

第66号 / 2010年9月20日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

第三十回研究会・日韓茶文化交流会Ⅱ 報告

申村修也

昨年秋にひき続き、二度目の韓国茶文化研修を行った。今回の韓国研修は、韓国で開催される二つのお茶に関する行事と陶器市に参加することが目的であった。河東で行われる野生茶祭と宝城で行われる茶香祭、それに利川で開催される世界陶器市の三つに参加するため、日程は五月四日〜七日に設定された。研修の予定としては、日本から金海空港に向かい、その後はバスで河東・宝城と巡り、光州からはKTXでソウルに行き、ソウルからは再びバスで利川に行き、その後、ソウルに戻り、仁川空港から帰国するという行程である。

◇河東野生茶祭参加

五月四日、金海空港に到着し、すぐに一路バスにて河東野生茶祭会場へ向かう。会場到着は午後四時半。そこでは東洋茶藝の河一男社長が迎え入れてくれた。河社長の案内で野生茶祭を見学。会場には河東のお茶屋さんがそれぞれ出店しており、メイン会場ではお茶を使った創作料理の品評会が行われていた。これは料理会場で観客の目の前で調理をして、完成したものを陳列すると同時に審査員の試食に供するというものであった。ある意味、お茶を「飲み物」と限定してしま

わないグローバルな発想といえるかもしれない。もちろん日本でも茶を食材にした料理を工夫している調理研究科・料理人はいるかもしれないが、総合的な茶の祭典での視点としては興味深いと感じた。そうした多角的な茶へのアプローチはほかにもあり、茶による美容、緑茶による足湯とマッサージなども実演されていた。もちろん茶そのものの展示が多く、チャチャゴリを着た女性による呈茶席（無料）もあり、茶具の展示即売場もあり、実際の茶葉による手揉み体験場もあった。



河東お茶祭りの呈茶



河東の夜の茶会

もつとも興味深かったのは、夕方、七時半からヨンサリ公園の河原で行われた「夜の茶会」である。河東は両側を山に囲まれた地形で、その中央を河が流れている。山の斜面には野生茶園が広がるといった情景である。「夜の茶会」はその河原で行われる。会場には音楽や舞踊が行われるステージと河の間に茶会場が設けられている。茶会場といっても、茶人たちが縦列する形で、自分の座席とお客の座席を確保しているだけで、特別な設営はない。河原の砂の上にシートを敷いて、その上に茶卓と茶道具・湯を置き、自分も座る。そして茶卓の向かいに客人用の段ボールが敷かれているだけである。わずか一畳にも満たない空間がその亭主と客に許されているだけともいえる。そうした亭主と客の空間が縦に連なり、それがまた列をなし、列と列のあいだを見学客が歩くという具合である。豊臣秀吉の北野大茶湯よりも「わび」た設営といえよう。

ところが、これがなかなかの雰囲気をもった茶会となる。

ステージでは民俗舞踊や音楽演奏が行われ、けっこうはポリリウムの音が出ているのだが、野外のせいで、音は空に響き、茶席にはそれ

ほど影響しない。

また、夕陽が山際にかかる頃から始まるため、薄暗くなっても目が慣れていて、それほどの闇を感じない。そうした闇に慣れた目に、茶席ごとに置かれた透明のガラス球に入った蠟燭の灯りがちようどよくなじむ。遠くから見ると暗い中で行われているようにしか見えないが、ステージの明かりもちようどバックライトとなり、むしろ人々のざわめきを鎮める効果が、その薄暗さというか灰明るさにはあった。

我々も、言葉はわからないまま、片手で座るように誘われるままに座に着くと、すぐに菓子が出され、それをいただき、そして煎茶を飲む、ということをごく自然に行えた。一度、経験すると、後はすべてが自然に行えた。通路を歩き、気が向いた席に座り、茶菓の饗応を受ける。そして感謝。その繰り返しである。

亭主が茶菓を供し、客が素直にそれをいただく。そして互いに喜びを確認し合う。とてもいい雰囲気の花会であった。そして、舞踊や音楽に興じることもできる。そこには窮屈な作法はない。ないというよりは必要がない。言葉がなくとも、互いを受け入れ、喜びを共

感できる。ひよっとすると、これが中世の郷村で行われた林間茶の湯ではなかるうかと、はたと思い当たった。真実そのものではなくても、こうした郷村における夏の一日だけの共同幻想的な時空間を楽しみ合うというのが、林間茶の湯の本質的な部分ではないかと感じた。

◇東洋茶芸茶工場見学

五月五日曇、ホテルを午前九時に出発してバスで再び河東に向かい、十時半に東洋茶藝のお茶工場「東天」に到着する。この日も河社長が出迎え、案内してくれた。

河氏の説明によると、ここは野生茶のみを扱っている。野生茶というのは、人工的な栽培を施さず、自然のままに成長させた茶樹のことである。「東天」社では、二〇年前に種から茶樹を育て、工場の操業は七年前からだという。自然成長なので、常にコンピューターで生育状況を観察しているとのことであった。そのためのソーラーパネルが備え付けられている。

河氏を前に、茶の湯文化学会会員から矢継ぎ早に質問がなされた。河氏はその質問に丁寧に応えてくださった。

まず、韓国茶樹の最古のものについての質

問が出された。河氏によると、千年樹という韓国最古の茶樹が裏山にあるが、これは高さが最高であることが認定されたことが、誤り伝えられて、最高が最古となったとのことである。茶樹の伝承としては八二八年に唐から将来されたという説と、『三國史記』に新羅の善徳女王の時にすでに六二三年にお茶を飲んでいるといふ記事があるという説があり、どちらも古い時代のことと確認できていないとのことであった。

野生茶のまわりには茶ガラが振りかけられていた。これは肥料として使っているとのこと。「雑草にも栄養を与えてしまうのでは？」という質問に対しては、野生茶にアミノ酸が多く含まれるようになることに重点をおいているので、それは気にしていないとのことであった。

野生茶と人口茶園の割合は不明。ただし、河東一帯はすべて在来種の野生茶とのこと。また、基本的に一年に二度の茶摘み。一番茶は、黒雲の前、だいたい四月二日頃に摘む。あとは秋に行く。野生茶は高級茶で、最高級茶は四〇グラム一万W、二番茶は四〇グラム六千Wとのことであった。

工場見学の際に、茶葉の選定機械を見せて

いただいた。これは、野生茶は葉の大きさがばらばらなので、それを同じ大きさ同士に分別する必要から作られたもので、社長みずから考案・製作したものであった。茶の製造工程は、

- 1 茶葉の分別
- 2 茶葉を炒る（少量の場合は手で、大量の場合は機械ドラム）
- 3 茶葉を捏ねる（これも手と機械の場合がある）
- 4 茶葉を乾燥させる

の四段階で、1→4を二回繰り返す。その際、炒る時の温度を二七〇度→二〇五度→二三〇度と変化させる。すると、もとの容積の半分くらいになる。

冷蔵庫も見学。室内は二度に保たれていた。試飲の場でも質問がたくさん出たがこれは割愛する。

◇宝城茶香祭見学

昼食後、バスで宝城に向かう。茶香祭見学のためである。会場は賑やかで、バスの駐車場にはテントの屋台が並んでおり、坂道を会場まで歩く。最奥にお茶の資料館があり、まずはそこを見学する。学芸員さんが案内してくれ、ゆつくりと韓国の生産茶について学ぶ

ことができた。茶香祭そのものはほとんど終盤で、製茶体験コーナーは終了しており、メインステージでは、お茶とは関係なく、音楽や踊りが披露されていた。

我々は物産館の建物に入り、宝城で生産され、売られているお茶を見学したり、試飲させてもらったりした。ここまで資料館の学芸員さんが案内してくれた。

もつとも興味深かったのは、抹茶の入れ方である。まず、大型の片口茶碗で抹茶をふつうに点て、それを各自の茶碗に移し入れるのである。つまり、各服点てではない。

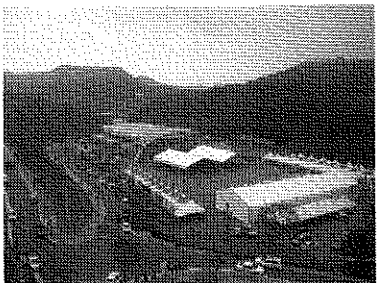
物産館には煎茶を淹れてくれるコーナーもあり、チマチヨゴリを着た女性たちもいた。もちろん茶碗などの焼き物も販売されていた。ふたたび近距離をバスで移動し、宝城の大茶園を見学。ここは韓流ドラマ「夏のかおり」

「太王四神記」のロケ地としても有名な場所。我々もそのきれいに感動。見応えのある茶園でした。

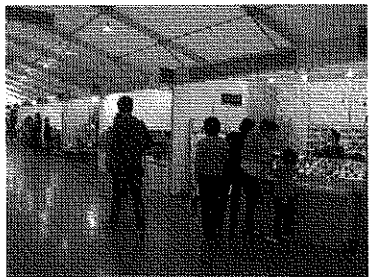
その後は、バスで光州まで行き、夕食を済ませて、KTXでソウルまで。



宝城の大茶園にて集合写真



宝城茶香祭のメイン会場



利川世界陶器市祭の一会場

◇利川窯元見学

五月六日、この日は一日、利川で焼き物一色の日を過ごす。通訳として東北歴史財団の李薫さんが参加してくださった。まず、一番の目的である墨田窯に行く。ここは金太漢の窯元である。金太漢さんは、池順鐸氏のお弟子さんで、もともと井戸茶碗を得意とす

る作家であったが、その後はいろいろな焼物にもチャレンジしており、最近はおつばら息子の金平さんが製作している。今回の訪韓では、金平さんをお願いして、利川の若手作家で茶道具を製作している方を集めていただいて、お話を聞かせていただいた。金平さん以外の若手作家は三人来てくださった。金平さんが、墨田窯の成立の歴史的な話をしてくださり、あとの三人の方々はそれぞれ御自分の得意とする焼物の説明と、どのような形で茶道具に取り組んでいるかという考えを話してくださいました。四人とも、まだ始めたばかりだが、実際の茶の湯も習い始めているようで、形だけの模倣の茶道具作りではなかった。

その後、金太漢氏の弟さんの窯元に行き、青磁の製作実演を見学させていただきました。ほんとうに土を立ち上げるところから成型の最後までを見せていただいた。昼食後、利川世界陶器市祭に行く。会場は年々広くなっている。当初の予定よりここを見学する時間が短くなり、一時間半ではとてもすべての会場を見つくすことは不可能であった。各自、自由行動にして見て回っていた。

私が見て回った印象としては、現代的なデザインの焼物が増えたと感じられた。以前は伝統的な青磁や白磁、粉青沙器がほとんどであったが、今年作品は、参加している窯元の中には、純粋に西洋的な焼物や、形は伝統的であっても、デザインなどが現代的なものが目立った。韓国の人には、こちらの方が受け入れられやすいのかもしれない。しかし、そうになると伝統的な技法は廃れていく可能性が考えられる。また、韓国らしさというものをどこに感じたいのか難しくなる。それとデザイン重視になり、質の向上がどの程度意識されているのかわからない様子でもあった。ざっと巡ったかぎりでは茶道具を展示している店は少なかった。その意味でも墨田窯に

来てくれた若手に期待したい。

利川を後にして、ソウルに早く到着したので、仁寺洞の骨董街も散策することにした。骨董街といっても、それはかつてのことで、今も骨董店は残っているが、多くはお土産物屋になっている。ここも自由散策とし、私は白磁の店「朴英淑窯」という店を見学した。

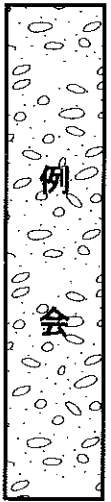
◇浅川巧墓に墓参

五月七日、帰国の日であるが、その前に朝のうち朝鮮民芸を柳宗悦とともに日本に紹介したことで有名な浅川巧の墓に詣でた。浅川巧は日本人でありながら、戦争中、朝鮮の人々、朝鮮の文化に理解を示し、日本軍が朝鮮の人々に日本語を強要する中で、みずから朝鮮語を学び、彼らと同じ視線で思考し、朝鮮の焼物に美を見出した人物である。

私はかねてから、浅川巧の墓が忘憂里洞の共同墓地にあることは知っていたが、なかなか訪ねる機会がなかった。今回は、茶の湯文化学会の韓国研修という機会をとらえて、浅川巧を知らない方々にも知っていただけるように、墓参を企画した。

墓は、駐車場から徒歩で二十分ほどの山の斜面にあった。最近、立派に建て替えられたようで、墓石も立派なものであった。墓参だ

けしか考えていなかったもので、供え花もなにも用意していなかったが、会員の皆さんが、墓をきれいに掃除してください、近くから野花を調達してください。その後、バスで仁川空港へ向かい、帰国の途に就く。ただし、関空組は飛行機が一時間遅れとなり、空港で時間を潰さざるを得なかった。成田組は予定通りの帰国であった。



東京例会

(平成二十二年五月二十二日)

「備前焼の香合について」

――その初期段階を中心に―― 下村奈穂子

備前焼香合の伝世品は数少ないが、茶会記によるとやきものの香合としては「今ヤキ」の香合に次ぐ二番目に用いられている。『松屋会記』久好茶会記の慶長六年（一六〇一）閏十一月二十日昼に古田織部の茶会で使用された「香合備前」である。この記述から備前焼の香合がどのような器形をしていたのかを知ることはできないが、備前南大窯と京都の弁慶石町から出土した一点の備前焼香合によつて、その形態を推測することが可能である。

二点の香合は丸い器形をし、胴は裾に向かって窄み、底は碁笥底で、高四、五cm前後、口径四cm前後であることから同形態の香合であることがわかる。また十六世紀末に美濃で生産された根太香合も同じ形態であることから、根太香合のような蓋を伴った香合であることが推察される。天正から慶長年間という日本でやきものの香合の生産が始まった時期に、美濃と備前でまず初めに唐物の「ネフト香合」を模倣したものを生産していたことは、日本のやきものが茶碗や茶入でもまず初めに唐物模倣をおこなった展開と同様である。また、備前焼が美濃と同じ形態の茶道具を生産していたことは、弁慶石町から香合と一括して出土した備前焼の茶碗からも指摘ができる。本発表では、弁慶石町から出土した初期段階の備前焼香合が根太香合のような器形をし、それによって、備前窯が美濃と同じように少なからず京都や堺・大坂で活躍していた茶人たちの趣向により茶道具を生産していたことを明らかにした。

「絵画資料に見える天目と天目台」

中村修也

天目については、中国天目山の寺院で使わ

れていたものが、日本に持ち帰られたことが、その名の由来だとする。しかし、天目山附近には窯がなく地名説は下火となり、形態分類が中心になった。竹内順一氏は、その特徴として、「①低い高台、②漏斗状に開いた腰部、③口縁部は内側にややすばまったのちに外反する「龍口」を呈する」（『角川茶道大事典』）と定義している。ところが、天目と分類される物の中には「龍口」ではない物も存在する。

一方、室町時代の『君台観左右帳記』では、曜変・油滴・烏蓋は建蓋とされ、龍蓋・玳皮蓋は天目とされ、区別されていた。天目の価値については、「上には御用なき物にて候間、不及代候也」と比較的低い。これまで絵画資料において、台と茶碗がセットで描かれていると、「台天目」として認定する傾向があった。しかし「清水寺縁起」（十六世紀）、「地藏菩薩靈驗記」（十四世紀）、「月次風俗図屏風」（十六世紀）等の路上の喫茶にも台に乗った茶碗で茶を飲む様子が描かれている。一服一銭的な喫茶に、比較的安価といえども唐物の天目が使われているはずがない。国焼の天目の可能性もあるが、中国においては茶卓と茶碗の組合せが一般的であることを考えると、「茶碗十台」台天目には無理がある

といえる。

天目は高台が低いから、台に乗せないと安定しないという説も根強いが、実際の天目がそれほど不安定なものとも思えなく、点て出しならば不安定さは問題がなくなる。むしろ、①貴重なお茶をこぼさないため。②茶碗を運ぶ際に素手では失礼にあたり、お盆が必要。③食事後の茶に、御膳代わりの卓が必要。という三つの理由から茶碗に台が添えられたと考えるべきではないか。

（平成二十二年六月二十六日）

「茶道名言の構造」

田中秀隆

『ビギナーズ日本の思想 茶の湯名言集』（角川学芸文庫）の編集過程で、「名言」とらえ方について考えさせられた。昨年『南方録』の現代語訳に完成された熊倉勲夫先生は、解説の中で、『南方録』を立花実山作の南坊宗啓を主人公とする「千利休随聞記」と説明し、「物語は、文学であって、それが歴史的事実を正確に伝えるものとは、歴史家は誰も考えていない」と述べられた。茶道名言をどう規定するかという問題と『南方録』をどう受けとめるかの問題には、共通する問題が存

在している。近代以降になれば、茶人自ら著

述もするので、その著述のみから抽出すれば、どこからも文句の出ない語録を作成することができる。しかしそれ以前の茶人の「名言」は他者が書き留めた「聞き書き」に頼るしかない。「聞き書き」が、歴史的事実を正確に伝えていないという問題を延長していけば、「聞き書き」の名言が、その人の歴史的発言を正確に伝えていないという問題にも突き当たる。文芸作品ならば、作者はその作品を書いた当人でなければならぬ。しかし、近代以降であっても、名言集を自ら編む人はおらず、他人が評価したものが、その人の「名言」として伝えられる。さらに、釈迦、孔子、ソクラテス、キリストなどの言行も、他者の「聞き書き」という構造は、同様であり、それがわれわれにとって重要な「思想」となっていることを否定できる人はいない。こうした思想の構造を考えた上で、過去の茶人達が評価した言葉という選択基準を設定することとなった。

静岡例会

（平成二十一年十月二十四日）

「茶の湯の普遍と特殊」

加えて、茶の湯の海外進出が盛んな今日、新たな普遍的展開の可能性を探った。

「『禅茶録』と茶の湯」

吉野白雲

『禅茶録』（寂庵宗澤著）は、文政十一年（一八二八）刊の木版本。「喫茶に禅意を宗とする」に始まり、「知足」という心の在り方を侘の茶とした。その実践行として点前をとらえている。茶の点前は自己の本性を観ずる修行で、器の扱いを通して三昧の境地に入る実践といい、器に心をうつす分、座禅を組む修行法よりも心が散漫になりづらい悟りに至る近道という。茶人は竹の茶杓を扱うときは、指一つ一つの指紋を意識し、竹の繊維一筋一筋を感じていくように扱う。侘を活かすということとは、修練と実践が不可欠で、それが身に付いたときに、侘茶は現実の中で本物になる。古田紹欽は「大仰に云へば茶書はこの書が一冊あればたくさんである」と語り、柳宗悦は「凡ての茶人の座右に置くべき名著」と評した。

以上四題講演の後、四氏をパネリストとし、小泊重洋司会により「日本人にとって茶の湯とは何か」についてパネルディスカッション

ホルストS. ヘンネマン

茶の湯に見る日本人の精神や外国から見た茶の湯といった観点から、茶の湯における「普遍と特殊」を中心に、国の内外を複眼的視野により、次の六項目について述べた。

一 茶文化の在来と外来

既に古来より日本人の未来はほとんど常に外来であった。嵯峨天皇の唐（もろこし）風喫茶や栄西禅師による禅仏教や宋代抹茶法を伝法した事、そもそも中国伝来の多くの渡来文化と同様に、茶文化もまた例外ではなかった。

二 国風の普遍化と茶の湯

「茶文化」受容から「茶の湯」創製への変動は、中古の平安中期以来、顕著な国風への傾斜であり、外来文化の国訳による普遍的模範たる「漢心（からごころ）」より「倭心（やまとごころ）」へとという流れは、唐物普遍に変わって、茶の湯の国風化の外界的特殊化を茶風鉢の内界的普遍化へと移した。

三 茶の湯風鉢の特殊化

茶数寄における外界の唐物から内界的和物への観念的変質という特殊化は、茶の湯に限ったことではない。従来諸芸諸道の普遍的観念すなわち「風鉢」が、寧ろ主導的且つ模範的

立ち、茶礼茶儀の外来茶風の和様化や茶の湯の理念形成にも多大な影響を与えた。

四 「侘」風鉢の特殊の深化と普遍化
心敬が教示するように、歌道と仏道とが観念的に同一視される一方、侘茶風鉢もまた、禅法的枯淡な「無一物」の境界を慕い、「一物も無陀数寄」に徹した「侘」の風鉢が生じ、さらに無心無着の浄念を思慕する「無」の風態を理想とする利休流の侘茶の湯が、「露地草庵一風の侘茶」として理念的に確立され、体系的普遍化を見せた。

五 茶の湯の近代化と外界の普遍化
茶の湯風鉢の隆盛や芸道の普遍化も、時代が明治に移り、西洋文明開化による近代欧化により大きく様変わりし、茶の湯の近代化の新たな外界の普遍化の幕開けとなった。茶の湯の近代への変貌と、さらに国際的、いな世界的広がりの方が築かれた。

六 現代の茶の湯の世界的普遍と精神的特殊性
茶の湯の近代化が齎した普遍化が、その大衆化や所謂「国民文化」への変貌にあったと考へ、西洋的教養すなわち西洋普遍的解釈論によって教養化した茶の湯が、日本の伝統芸道芸能であり、総合芸術であると説明された。

を行った。

(平成二十二年五月三十日)
「茶の湯の竹芸」

池田瓢阿

今、我々が茶室で用いている茶杓、茶筌、炭取などの竹の茶道具はすでに今から千二百年ほど前に中国・唐代の茶博士、陸羽により著された「茶経」のなかに現れる。「茶経」の「之器(茶器について)」の項には「筥(炭籠)」、「則(茶杓)」、「札(ささら茶筌)」、「都籃(茶筌)」など、竹の茶道具の記述があり、茶の栽培や製茶の道具としても多くの場面で竹が使われている事を知る。

茶の原木は中国の雲南省にあるとされる。はじめは薬として、やがて嗜好品として飲用され、四川省や、インド、タイ、ベトナムへと伝えられた。雲南省をはじめとする一帯は高地だが、温暖で湿潤な気候のため、茶に適するとともに、竹にも適した土地である。現在、茶葉の一大生産地である中国・揚子江以南にも竹林が多く存在するように、昔から竹は茶の傍らにあり、製茶に必要不可欠の道具として茶の文化の一端を担い、その絆を深めてきたといえる。

鎌倉時代初頭に、茶は竹林に恵まれた南宋より日本に伝えられた。当然、竹の茶道具も少なからず渡来したと想像される。やがて茶の和風化が進み、侘茶が台頭すると、いつそう竹の茶道具は侘茶人の感性に合うものとして茶の湯との関わりを深めいく。その後、千利休らにより、竹花入れや、竹茶杓などが手造りされると、竹による茶の道具は表道具として、その用途に美的精神性を加え、珍重され、茶の湯の竹芸は我国における独自の茶の文化の発展に、重要な役割を果たすことになるのである。

近畿例会

(平成二十一年十二月十九日)

「旗本茶人舟越永景への基礎的考察」

八尾嘉男

本報告で取り上げた舟越伊予守永景(慶長二年(寛文十年・一五九七年)〜一六七〇年)は、慶長九年から駿府で小姓役を勤め、元和二(一六一六)年の江戸勤仕転任を経て、寛永十五(一六三八)年から建物の造営・修繕等を管掌する作事奉行職に就任している。

舟越永景の茶会は、『久重茶会記』(『松屋会記』)所載の慶長十六年九月八日・九日

(父・景直が没し、家督を継いで約半年後)

の他会と自会がある。八日は古田織部の晩の会で、織部は建築中の小座敷について遅くまで話し込んでいる。九日の自会は驢蹄口の唐物茶人を縞の袋とともに置き合わせており、黒目のもので大変見事であるという感想を松屋久重は記している。十五歳で唐物を用いた手前ができたということは、それまでに舟越が茶の湯の習練をかなり行なっていたことを意味する。報告では、舟越の茶系を茶人の系譜書等の記す古田織部、後に小堀遠州門下としつつ、織部と舟越の年齢差(五十五歳)を踏まえ、初学として織部門下の父・景直から手ほどきを受けていた可能性を指摘した。次に、寛文五(一六六五)年十一月八日に片桐石州と共に行なった徳川家綱への献茶について検討し、寛文五年までに宗匠となっており、その高名さから献茶者に入選されたこと、舟越も家綱の御意にかなない、御膳と褒美が下賜されたことを確認した。また、谷端昭夫氏のご教示を受け、献茶の機会が設けられた背景に、前年から順次実施されていた寛文印知という所領の再確認・文書の再交付政策を踏まえる必要があることを述べた。

続いて、『久重茶会記』や撰津国伊丹郷町

の有岡道瑞が編んだ『茶湯百亭百会之記』所載の茶会等から、好み物などが存在し、相当高い評価を受けていたことや目利きであったこと、小堀遠州が江戸に帰参した際、江戸での茶会開きの客衆の一人として定着していたことを述べた。最後に、当初、一個の宗匠として認識されていた舟越が、時の経過と共に遠州流の系譜に取り込まれていった可能性について触れ、報告を終えた。

「付記」
本報告は財団法人三徳庵・平成二十一年度茶道文化奨励研究助成の成果の一部として行ないました。大日本茶道学会のホームページ <http://www.santokuan.or.jp/home.html> からPDFファイルでご覧頂ける成果報告書も併せて御参照頂けますと幸いに存じます。

例会のご案内

東京例会

十二月十一日(土) (会場 根津美術館)

午後二時(仮)

「未定」 吉岡明美氏

「薩摩焼の茶碗について」(仮)

松村真希子氏

一月二十九日(土) (会場:根津美術館) 午後二時(仮)

「近世前期武家の茶の湯と江戸・京都」

旗本茶人を中心に(仮)

八尾嘉男氏

「茶道具の銘についての一考察(仮題)」

砂澤祐子氏

静岡例会(会場:静岡市・静岡県コンベンションアーツセンター)「グランシップ」

「午後一時(仮)」

十月三十一日(日)

(第四回世界お茶まつり実行委員会と共催)

第一部 講演「世界に広がる茶の文化」

谷 晃氏(茶の湯文化学会会長)

第二部 鼎談「茶の文化とロマン」

川勝平太氏(静岡県知事)

芳賀 徹氏(静岡県立美術館館長)

熊倉功夫氏(静岡文化芸術大学学長)

東海例会(会場:名古屋文化短期大学アセンブリ・ホール) 午後六時(仮)

十一月十九日(金)

「天王寺屋他会記に見る交友関係」

山田哲也氏

「茶の湯と金工」 長谷川まみ氏

近畿例会(会場:観峰美術館に変更になりま

した。御注意下さい。午後二時(仮)

十二月十一日(土)

「七事式の成立と背景」 山田征子氏

「十八世紀日本の文化様相―『槐記』を中心に―(仮)」 小林善帆氏

北陸例会(会場 未定) 午後二時(仮)

三月二十六日(土)

「未定」

金沢例会

十月二十三日(土)

見学会:十三時半〜十七時

集合時間・場所:十三時半に金沢市立中村記念美術館前

見学場所:金沢市立中村記念美術館、本多藏品館、成巽閣

見学会終了後、成巽閣よりバスで宿泊・懇親会会場「滝亭」へ案内

参加費:千五百円 なお茶の湯文化学会会員は、二十三日・二十四日の二日間は、見学会に参加しなくても中村記念美術館・本多藏品館・石川県立美術館・前田土佐守資料館は団体割引にて入館できます。

懇親会・宿泊:犀川温泉「滝亭」(金沢市末町二十三〜一十)

懇親会・宿泊:犀川温泉「滝亭」(金沢市末町二十三〜一十)

懇親会・宿泊:犀川温泉「滝亭」(金沢市末町二十三〜一十)

懇親会・宿泊:犀川温泉「滝亭」(金沢市末町二十三〜一十)

懇親会・宿泊:犀川温泉「滝亭」(金沢市末町二十三〜一十)

懇親会・宿泊:犀川温泉「滝亭」(金沢市末町二十三〜一十)

懇親会・宿泊:犀川温泉「滝亭」(金沢市末町二十三〜一十)

懇親会・宿泊:犀川温泉「滝亭」(金沢市末町二十三〜一十)

懇親会・宿泊:犀川温泉「滝亭」(金沢市末町二十三〜一十)

懇親会・宿泊:犀川温泉「滝亭」(金沢市末町二十三〜一十)

懇親会は十八時半～二十時
懇親会費：八千五百円（入湯料含む）
懇親会・宿泊費：二万円（翌日送迎バスあり）

二十四日（日）（会場：金沢大学自然科学レクチャーホール 午前十時～十二時三十分）

記念講演

「世界の茶文化と日本の茶文化」

谷 晃氏（茶の湯文化学会会長）

「加賀藩 武士の茶文化」

長谷川孝徳氏（北陸大学教授）

参加費：会員千円（一般二千円）

参加申込み等のお問い合わせ先

参加をご希望の方は、事前に申込みをお願い致します。

担当 瀬戸 元

（電話・FAX〇七六一二五八一四五七八

E-mail h.seto@tenor.ocn.ne.jp）

参加締切り日：十月三日（日）定員に達し

次第締切ります。

なお、見学会、宿泊、懇親会の伴うものは、申込があった時点で振込用紙、会場のパンフレット等を送付予定です。講演会だけの場合は、当日参加費を納めてください。

高知例会（会場 高知県立文学館慶雲庵茶室
午前十時～十二時）

十二月十二日（日）

茶の湯関係文献を読み所感の発表

発表者未定

茶事（十二時～十六時）会費五千元

二月十三日（日）内容未定

一般の方々が茶の湯に親しんでもらうための茶席を設ける。

会場 高知県立文学館慶雲庵茶室

会

時 間 十時～十六時まで

開催予定日 毎週日曜日を主体とする

（会費三百円）

第四回国際OCHA学術会議

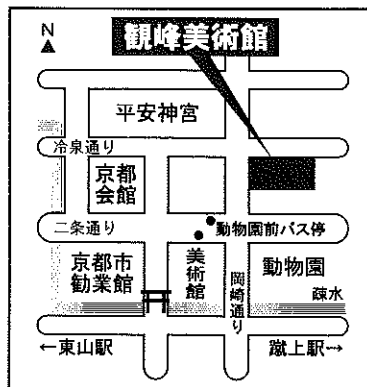
第四回国際OCHA学術会議が二〇一〇年十月二十六日～二十八日の三日間行なわれます（茶の湯文化学会後援）。茶にかかわる産業から文化にいたる様々な分野の学術研究者が世界各地から集います。是非ご参加ください。会場は静岡市・静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ」、東静岡駅下車南口より徒歩三分。

お知らせ

*来年度の大会は六月に東京で開催する予定です。日程や会場等詳細が決まり次第、ホームページにてお知らせいたします。発表を希望される方は八〇〇字程度の要旨を添えてお申し込みください。応募者多数の場合は、審査の上決定いたします。

*年会費を未納の方は同封しました払込用紙にて至急お払い込みくださいますようお願いいたします。

*第三十二回研究会が高知にて開催されます。同封の参加申込書にてお申し込みください。たくさんのご参加をお待ちしております。



地下鉄東西線「東山」駅より徒歩15分
市バス5・32・100番「動物園前」下車徒歩5分